

平成 23 年 5 月 31 日現在

研究種目：若手研究（B）
研究期間：2008～2009
課題番号：20720173
研究課題名（和文）所領移動（転封）の影響を踏まえた譜代大名家文書の構造と伝来過程の分析
研究課題名（英文） Research of the Structure and Transmission Process of the *Fudai* Lords Family Archives: With the Influence of Fief Change (*Tempō*)

研究代表者
日比 佳代子 (HIBI KAYOKO)
明治大学・文学部・兼任講師
研究者番号：40468830

研究成果の概要（和文）：

研究成果は①内藤家文書構造の把握と②転封過程の解明の二側面において得られた。

①については、内藤家文書を対象に、江戸時代の段階での記録の管理帳簿であるところの現用時目録を調査・抽出、撮影し、この中から、特に転封時の記録管理の状況を知りうる「御用部屋置付白木大箆筒引出目録」のデータベース化を行った。この作業によって、特に文書管理における江戸の重要性を把握する事が出来た。また、内藤家文書を対象に転封時に発生する文書を調査し、概要を展示会 2009 年度明治大学博物館特別展『大名と領地』で示し、その内容を図録として刊行した。

②については、転封時における内藤藩の旧領地、新領地、江戸、大坂という四地点での動きを記録した「奥州磐城平日州延岡御所替覚帳」をデータベース化し、雑誌に発表した。さらに、従来の転封研究では注目されていなかった藩の日記史料に注目する事によって、内藤家の磐城平から延岡への移動の実現過程を解明し、雑誌に論文「転封実現過程に関する基礎的考察」として発表した。そこでは、江戸藩邸が情報の収集発信のセンターになっている事、転封業務の命令系統が江戸藩邸を中心に形作られている事など、文書作成の前提となる転封時の藩政機構の動きを明らかにし、転封によって大名家に生じる経済的な負担や家中に与える影響、他大名家とのやり取りの重要性などについても指摘した。

研究成果の概要（英文）：

The results of the study are composed of two elements: elucidating 1) the structure of Naito family archives and; 2) the process of fief change (*Tempō*).

1) The researcher has constructed a database of the administration documents about the fief-change based on "Catalogue of the Documents in the Plain-wood-big-chest of the Administration Office (*Goyo beya okizuke shiraki odansu hikidashi mokuroku*)". We have organized an exhibition of the documents in relation with the fief-change at the Meiji University Museum in October-December 2009 and published the catalogue of the exhibition.

2) We have constructed a database of the itinerary of fief-change in 1747 based on "Memoir on the Fief-change from Ōshū-Iwakidaira to Nisshū-Nobeoka (*Ōshū Iwakidaira Nisshū Nobeoka ontokorogae oboechō*)" and published a historical source information essay and a thesis about the process of fief-change. As a result, it was proved that the Edo-office of the clan played a role of the information center, that the Edo-office conduct the managements of fief-change affairs.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	700,000	210,000	910,000
2009年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,200,000	360,000	1,560,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・日本史

キーワード：日本史 史料論 藩

1. 研究開始当初の背景

近年、幕領・小規模譜代藩領・旗本領などの非領国地帯を対象にして、近世後期の地域社会における中間支配機構の行政組織の機能や、領主支配を支える仕組みなどの解明が進んだ。

次の段階として武家政権による具体的な統治行為と既述の研究の成果を突き合わせる必要が指摘されているが、非領国地帯の武家政権による統治行為の実態解明は、領主文書の残存率の低さが障害となり十分に進んでいない。

2. 研究の目的

非領国の領主文書の残存率の低さは、個別領主の領域規模が小さい、領域変更が頻繁に起きるといふ非領国地帯の性格に由来する。非領国地帯領主の統治行為の実態解明の為、史料論的分析をもちいて、上記の地域の領主文書の特徴を明らかにする。

さらに、史料論の分野では、近世の領主文書の形成過程に影響を与える要因の一つとして政治的変動をあげており、この中には転封・改易という要素が含まれるとの整理をしている（近世領主文書の伝来と構造、『アーカイブズの科学』、国文学研究資料館編 {当該箇所担当：福田千鶴}、2003）。近年、この分野の研究が進み、領主文書の形成過程に関する個別事例が蓄積されつつあるが、転封が領主文書の形成過程に与える影響を具体的に分析した論考は殆どない。

近世領主文書の特徴解明という史料論の課題にも答えるべく、非領国を形成する領主形態の一つである小規模譜代大名で、な

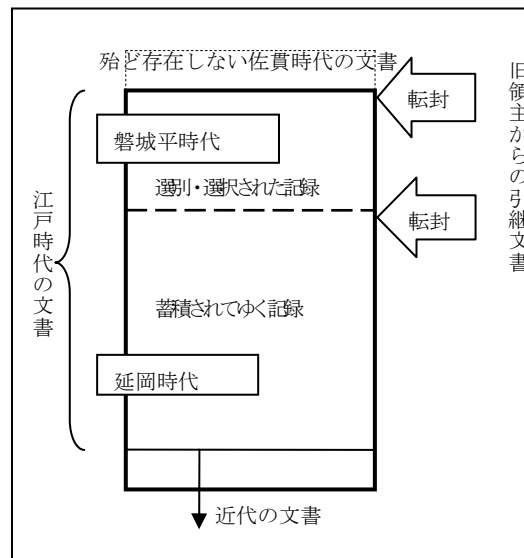
かつ所領移動（転封）経験のある大名家の文書に注目し、所領移動（転封）の影響を踏まえた譜代大名文書の構造と伝来過程を解明する。

3. 研究の方法

本研究では所領移動（転封）経験のある譜代大名文書として、譜代大名の内藤家文書（近世部分約4万5000点、明治大学博物館蔵）を素材とする。

譜代大名の内藤家は天正18（1590）年に上総国（現千葉県）に所領を拝領し、元和8（1622）年に陸奥国磐城平（現福島県）に転封、延享4（1749）年に日向国延岡（現宮崎県）に転封、と二度の所領移動を経験してい

【内藤家文書の構造 概念図】



る。本文書の内、江戸時代の文書についてみると、佐貫時代のもは殆どなく、1/3 が磐城平時代のも、2/3 が延岡時代のもので、これに転封時の旧領主引継文書が含まれている。(概念図参照)

内藤家文書は、転封以前の磐城時代の文書を含んでいる事、かなりの量の転封関係文書を含んでいる事に特徴がある。

以上の特徴を踏まえ、文書の全体像を把握する上で重要になる文書の作成・保管に深く関わる藩政機構の整備過程の調査、現用時目録(江戸時代の段階での記録の文書管理帳簿)の調査を行い、重要な史料については、データベース化を行う。また、内藤家文書に含まれる転封時に作成された文書、転封時に旧領主から引き継いだ文書を抽出・調査し、その特徴を分析すると共に、藩政にとって転封がどのような意味を持ち、どのような影響を与えるものであるのかを明らかにする。

4. 研究成果

研究成果は①内藤家文書構造の把握と②転封過程の解明の2側面において得られた。

①については、内藤家文書を対象に、江戸時代の段階での記録の管理帳簿であるところの現用時目録を調査・抽出、撮影し、この中から、特に転封時の記録管理の状況を知りうる「御用部屋置付白木大箆筒引出目録」のデータベース化を行った。

この作業によって、江戸時代段階で内藤家がどのような文書を重要史料と認識しているのかという事や、文書管理における江戸の重要性を把握する事が出来た。

また、内藤家文書や、延岡転封の際の旧領主となる大名牧野家の文書に含まれる転封関係文書を調査し、その概要を展示会2009年度明治大学博物館特別展『大名と領地』で示し、その内容を展示図録『大名と領地—お殿様のお引っ越し—』(日比佳代子・外山徹編著、明治大学博物館、2009年10月)として刊行した。

この作業によって、転封時に各藩が作成する文書の全体像、転封時作成文書の特徴を把握する事が出来た。

②については、内藤家文書および牧野家文書の転封関係文書の調査成果をもとに、転封時に生じる様々な事務処理について記した転封の一件帳をさらに詳しく分析した。

内藤家文書の中に複数伝世している一件帳の中から、旧領地、新領地、江戸、大坂という四地点での内藤藩の動きを記録している「奥州磐城平日常州延岡御所替覚帳」に注目、本史料が、江戸・大坂の記録という、既に他の研究者によって分析発表されている転封

の一件史料にはみられない特徴を持つ事を重視し、本史料についてデータベース化を行い、「延享四年「奥州磐城平日常州延岡御所替覚帳」(『明治大学博物館研究報告』14号、2009年3月)として史料紹介を行った。

さらに、従来の転封研究は一件記録を中心に分析が行われてきた為、儀式化された転封の手続きや幕府・他藩とのやり取りは明らかにされているが、転封あたっては、どこから指示命令が出されるのか、家中の武士達はどの様に移動するのか、新領・旧領民とどの様に向き合うのか、新領知の統治実現の為にどの様な事を行うのかといった具体的な転封実現過程については十分に明らかにされていなかった。

従来の転封研究では注目されていなかった藩の日記史料に注目する事によって、上記の点を克服する事を目指し、転封時の藩の日記についても調査を行った。関係役職の職務内容を踏まえて複数残されている日記史料の性格を検証し、特に江戸の御用部屋の日記を素材として取り上げる事とし分析をおこなった。

転封の一件史料だけではなく藩政日記を素材に加える事によって、より具体的な転封実現過程が明らかになった為、その分析結果を「転封実現過程に関する基礎的考察—延享四年内藤藩の磐城平・延岡引越を素材として—」(『明治大学博物館研究報告』16号、2011年3月)として論文発表した。

ここでは、転封によって大名家に生じる経済的な負担や家中に与える影響、他大名とのやり取りの重要性などについて指摘すると共に、旧領・新領だけではなく、江戸や大坂における内藤家中の動きについても明らかにし、特に江戸藩邸が情報の収集発信のセンターになっている事、転封業務の命令系統が江戸藩邸を中心に形作られている事など、文書作成の前提となる転封時の藩政機構の動きを明らかにした。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

①日比佳代子【転封実現過程に関する基礎的考察—延享四年内藤藩の磐城平・延岡引越を素材として—】『明治大学博物館研究報告』16号11～26頁、査読有、2011年3月

②日比佳代子「延享四年「奥州磐城平日常州延岡御所替覚帳」(『明治大学博物館研究報告』14号11～45頁、査読無、2009年3月)

〔図書〕（計1件）

①日比佳代子・外山徹編著 展示図録『大名
と領地—お殿様のお引っ越し—』明治大学博
物館、2009年10月

6. 研究組織

(1) 研究代表者

日比 佳代子（ヒビカヨコ）

明治大学・文学部・兼任講師

研究者番号：40468830